

SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS

No. 119 November 2009



グローバルCOE

◆ 10月よりグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」始動 ◆



拠点開設式での佐伯総長のあいさつ

グローバルCOE (Global Center of Excellence; GCOE) とは、我が国の大学院の教育・研究機能の強化を目的とした文部科学省の補助金事業です。2009年6月、岩下明裕・スラブ研究センター長をリーダーに据えた北大の人文・社会系グループが組織するGCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアの世界」が採択され、3ヵ月間の準備期間を経て10月に正式スタートとなりました。

本プログラムは、今日、ユーラシア各地で生じている境界をめぐる

対立・紛争を国境問題に限らず、文化摩擦といった表象からも考察し、境界問題を読み解くための新しい研究領域・拠点を確立すること、さらにこの地域に境界研究ネットワークを立ち上げて、世界の境界研究コミュニティの一角を占めることを目的としています。12月19日に予定される第一回GCOEシンポジウムでは、「世界のボーダースタディーズとの邂逅」と題し、代表的コミュニティであるIBRU (The International Boundaries Research Unit)、ABS (the Association for Borderlands Studies)、BRIT (Border Regions In Transition) から代表者を招く予定です。

また、本GCOEプログラムは、社会還元を一つの柱としており、セミナー主催・共催に加え、博物館展示とWebページも新たな還元場としています。博物館展示では、北海道大学総合博物館の二階には展示スペースが設けられ、第一期展示「ユーラシア国境の旅」が開催中です。スラブ研究センターがこれまで蓄積してきたユーラシアの国境地域にかかわる歴史と現況がパネルおよびPCディスプレイを通じて展示されています。国境線が描き込まれていな



GCOE 地球儀

い地球儀（直径1m）は、山脈の高さのみならず、海溝の深さも再現されており、新聞各紙、テレビ各局から取り上げられ、GCOEのシンボルとして多くの観覧者を引きつけています。なお、第2期展示は、根室市歴史と自然の資料館からお借りする国境標注と海底ケーブルの実物展示をメインに据え、「知られざる北の国境」をテーマに本年12月19日から公開予定です。

博物館展示と連動した土曜市民セミナー「知られざる北の国境」（全5回）も開催しており、10月3日

には満席の聴衆のもと、第一回講演「ボーダースタディーズと『北の国境』」（岩下明裕）がおこなわれました。国境に関する市民の関心度は高く、GCOEセミナー「北朝鮮をとりまく境界線」（10月15日開催）では、センター内大会議室のフルハウスを記録しました。しかし、展示への反応やセミナー会場の人数から判断する限り、市民の関心は専ら「国境線」「北方領土問題」といったハードな境界問題にとどまっており、移民、文化、といった境界線がはっきりしない問題に対する事象への反応は鈍いきらいがあります。より広い境界問題へ如何にして興味を喚起できるかが、社会還元をおこなう場合の課題と思われる。



なお、これら博物館展示やセミナー情報は、境界研究 HP（URL www.borderstudies.jp）で逐次告知していきます。皆様方のアクセスと同時に、博物館展示、ホームページ用のコンテンツ提供も広くお待ちしております。著作権の「壁」は、東西ドイツの境界をなしていた「ベルリンの壁」の如くコンテンツ制作者の前に立ちはだかっているため、担当者は日々苦悩しており、皆様の協力をつとにお願いする次第です。[藤森]

新学術領域研究

◆ 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」 ◆ 第2回国際シンポジウム

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第2回国際シンポジウムは、2009年12月12～13日に法政大学市ヶ谷キャンパスで開催されます。テーマは「ユーラシア地域大国の政治比較：序章」です。自由化、グローバル化が進行する中で、政治変化のダイナミズム、価値理念の再編、体制移行の実態を明らかにすると同時に、地域大国の政治比較の方法論を模索するものです。[唐亮（組織委員長）]

*この国際シンポジウムは今年度のスラブ研究センター冬期国際シンポジウムを兼ねて開催されます（編集部注）

プログラムの概要

新学術領域研究第2回国際シンポジウム「ユーラシア地域大国の政治比較：中国、ロシア、インド、トルコ」

主催：新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」政治班（第2班）

共催：北海道大学スラブ研究センター、法政大学中国基層政治研究所、北海道大学グローバルCOEプログラム、早稲田大学現代中国研究所

日時：2009年12月12～13日

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎 S405

使用言語：日本語と英語（同時通訳あり）

12月12日（土）

13:30-13:45 開会式

13:45-15:30 基調講演「地域大国の政治流れをどう捉えるか？」

司会：唐亮

塩川伸明（東京大学）「ペレストロイカ・冷戦終焉・ソ連解体：20年後の地点からのパースペクティブ」

中兼和津次（青山学院大学）「経済体制移行の比較研究：社会主義国はなぜ資本主義に向かつて脱走するのか」

絵所秀紀（法政大学）「インド経済台頭の衝撃：開発の政治経済学の再検討に向けて」

15:45-17:45 ラウンドテーブル「地域大国の政治をどう比較するか？」

司会：毛里和子（早稲田大学）

パネリスト：田畑伸一郎（北海道大学）、近藤則夫（日本貿易振興会アジア経済研究所）、天児慧（早稲田大学）、高原明生（東京大学）、松里公孝（北海道大学）

18:00-20:00 レセプション

12月13日（日）

10:00-12:00 第1セッション「近代化と民主主義のためのサブナショナルな単位：ロシア、中国、インドの村社会とNGO」

司会：デヴィッド・ウルフ（北海道大学）

トミーラ・ランキナ（ド・モンフォール大学、イギリス）「ロシアとインドのサブナショナル民主主義を規定する諸要因：分析の予備的枠組み」

田原史起（東京大学）「中国とロシアのコミュニティ・ガバナンス：現地調査に基づく比較」
光磊（サンディエゴ大学、アメリカ）「社会紛争と紛争解決の政治学：地方における国家・社会関係の中印比較」

討論：家田修（北海道大学）

13:15-15:15 第2セッション「偉大さへの鍵。地域大国の宗教政治」

司会：宇山智彦（北海道大学）

クリストファー・マーシュ（ベイラー大学、アメリカ）「アジア太平洋地域における宗教、文明、国家間紛争」

松里公孝（北海道大学）、澤江史子（東北大学）「非アラブ諸国におけるイスラーム教会論：ロシア、トルコ、中国、アゼルバイジャン」

三輪博樹（中央大学）「題未定」

討論：飯塚正人（東京外語大学）

15:30-17:30 第3セッション「社会階層の再編と社会的亀裂」

司会：唐亮（早稲田大学）

ヴァムシ・ヴァクラブハラナム（ハイデラバード大学、インド）「階級は重要か？中国とインドにおける階級構造と不平等の昂進」

林裕明（島根県立大学）「ロシアの中間層 - 構成と価値観に見る多様性」

園田茂人（東京大学）「中国、インド、ロシアにおける社会的不平等の認識の違い：2008年アジア。バロメーターの比較分析」

討論：菱田雅晴（法政大学）

17:30-17:40 閉会式

◆ 比較帝国史研究会の開催 ◆



研究会のようす

9月3日にスラブ研究センター4階大会議室で比較帝国史研究会が開かれました。

第1部：報告者 池田嘉郎（新潟国際情報大学）「共和制の帝国：ソ連に帝国論を適用するための試論」

第2部：報告者 山室信一（京都大学人文科学研究所）「国民帝国としての日本：比較帝国史への一視点」

この研究会は、①科学研究費基盤B「近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史」と②新

学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4班「帝国の崩壊・再編と世界システム」の主催で、「帝国の比較」を共通のテーマとして開催されたものです。当日は約50名が参加し、当初第1部の会場として予定されていた小会議室に入りきらなかったために急ぎょ大会議室に会場を換えておこなわれ、比較帝国史の様々な論点について活発な議論が交わされました。なお、この研究会の内容については詳しくは、新学術領域領域研究HP第4班活動報告のコーナーをご覧ください。[後藤]

◆ 外国人研究員 ◆

第1班の新学術領域研究外国人研究員として、ジャワハルラール・ネルー大学 (Jawaharlal Nehru University, New Delhi) のハッピーモン・ジェイコブ氏 (Happymon Jacob) の採用が決まりました。また第2班の外国人研究員に華東師範大学 (East China Normal University, Shanghai) の楊成氏 (Yang Cheng) の採用が決まりました。ジェイコブ氏は2009年12月から2010年2月末まで、楊氏は2009年10月から2010年7月までスラブ研究センターに滞在しながら研究活動をされる予定です。お2人とも専門は政治学、国際関係論です。なお、第2班のプロジェクト研究員として採用されていた任哲氏は、IIPのプロジェクトに参加するため、9月末で一旦雇用が中断されました [後藤]

◆ 2009年度公募研究 ◆

2009年度公募研究の結果が決まりました。文科省の専門委員会による厳正な審査の結果、以下の5つの公募研究が採択されました。いずれも、2009-10年度の2年間を研究期間とするものです。[後藤]

研究課題名	研究代表者	所属機関
世紀転換期ガリツィアにおけるナショナリズムの鏡像	宮崎悠	北海道大学法学研究科
台頭する中産階級とその政治的社会的インパクト：中印露比較研究	園田茂人	東京大学大学院情報学環／東洋文化研究所
東アジアの華人文化圏諸都市におけるサブカルチャー受容と若者の感性の変化	千野拓政	早稲田大学文学学術院
民族紛争における地域大国の役割に関する比較研究	月村太郎	同志社大学政策学部
国家やグローバル経済に対するインド農民の自己表象のあり方	中谷純江	国立民族学博物館

詳しくは、新学術領域研究 HP「募集」の項目をご覧ください。[後藤]

研究の最前線

◆ オホーツク海の環境保全に関する国際シンポジウムの開催 ◆

11月7日(土)～8日(日)に北大低温科学研究所環オホーツク観測研究センターなどとの共催により、「オホーツク海の環境保全に向けた日中露の取り組みにむけて」と題する国際シンポジウムが北大学術交流会館で開催されます。本シンポジウムは、北大の「サステナビリティ・ウィーク 2009」の一環として開かれるものです。

スラブ研究センターは、2007年度より、低温科学研究所などとの共同により、特別教育研究経費プロジェクト「環オホーツク環境研究ネットワークの構築」を実施しています。オホーツク海の環境保全においては、アムール川の影響が大きいことが近年の研究で明らかにされています。一つは、アムール川を起源とする溶存鉄がオホーツク海や隣接する親潮域の基礎生産に果たす役割です。もう一つは、アムール川流域で排出される種々の汚染物質がオホー

ツク海に及ぼす影響です。このように、オホーツク海の環境保全のためには、アムール川流域を同時に保全する必要があるわけです。本シンポジウムでは、日中露の3カ国の研究者による討論を通じて、この陸域・海域の環境保全に向けた国際協力のあり方を議論します。センターが直接関わるセッションでは、黒龍江省社会科学院の笄志剛氏や華東師範大学の封安全氏が報告します。

詳しいプログラムや報告の要旨については、本シンポジウムのサイト (<http://www.chikyu.ac.jp/AMORE/2009symposium.html#top>) をご覧ください。日中露の同時通訳が付きまます。事前の申し込みは不要です。皆様のご参加を歓迎します。[田畑]

◆ 2009年度 ITP (International Training Program) フェローとして、◆ 3名を派遣

2009年度 I T P フェローの公募が2次にわたっておこなわれ、下記の3名が採択されました。

氏名	所属	研究テーマ	派遣先	派遣期間
浜由樹子	津田塾大学	ユーラシア主義とアジア主義	ハーヴァード大学デ イヴィス・センター	2009.8.25 ~ 2010.6.10
溝上宏美	京都大学	東欧からイギリス への移民労働者	オックスフォード大 学聖アントニー校	2009.6.25 ~ 2010.3.31
任哲	北海道大学	中露政治比較	ジョージ・ワシント ン大学エリオット校	2009.9.30 ~ 2010.7.22

全員が4-5月に派遣中の活動についてのブリーフィングを受け、計画通り留学先での生活を開始しています。[松里]

◆ 笹川平和財団との共催セミナー「エネルギーの対口依存は危ういか? ◆ 存在感を増すロシアの資源外交」の開催

センターは、2009年7月22日に東京で笹川平和財団との共催セミナー「エネルギーの対口依存は危ういか? 存在感を増すロシアの資源外交」を開催しました。このセミナーは、日本でも近年輸入が急増し、今後もさらに輸入が増加していくと見られるロシアのエネルギー(石油・天然ガス)について、その政治的、経済的安全性を考えてみようというものです。欧米では、ウクライナやベラルーシに供給される石油やガスについて、ロシアが資源を外交の手段として使っているのではないか、そのようなエネルギーをロシアに依存するのは危ういのではないかという議論が繰り返されてきました。サハリンの石油やガスについても、数年前に同様の議論がありました。このセミナーでは、この問題を考えるうえでの日本を代表する論客である横手慎二(慶応大学)、本村真澄(JOGMEC)、栢俊彦(日本経済新聞社)の3氏を講師として、議論しました。当日は、80人を超える参加者があり、報告も討論も大変盛り上がったように感じられました。会場を提供し、準備に当たっていただいた笹川平和財団に厚く感謝申し上げます。なお、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第3班「持続的経済発展の可能性」においては、エネルギー問題を重要な研究課題の一つとしているため、このセミナーも同研究からの支援を受けていることを記しておきます。このセミナーの記録は、「スラブ研究センター・レポート」No.4にまとめられていますので、センター・ホームページをご覧ください。[田畑]

◆ ポール・ウェクスラー名誉教授の特別講演 ◆

去る8月10日(月)、テル・アビブ大学言語学科(イスラエル)のポール・ウェクスラー教授による言語学の講演会が開かれました。

ウェクスラー教授は、センターともご縁のある故ジョージ・シェヴェロフ教授の高弟で、「純粋主義と言語」(インディアナ、1974年)や現在編集長を務める「スラヴ語通時音韻論」シリーズの1冊として刊行された「ベラルーシ語通時音韻論」(ハイデルベルク、1977年)といったスラヴ語研究で著名ですが、「イディッシュ語 - 15番目のスラヴ語: ジュデオ・ソルブ

語からドイツ語への部分的変容に関する研究」(ベルリン、1991年)、「アシュケナーズ・ユダヤ人: ユダヤのアイデンティティを求めたスラヴ・チュルク人」(オハイオ、1993年)などの言語接触の視点によるイディッシュ語研究でも多くの業績を挙げておられます。

西ゲルマン語族に属すると言われることが多いイディッシュ語が、実はスラヴ語として扱われるべき言語であるという教授の大胆な説が、バーナード・コムリー、エドワード・スタ



右:ダニレンコ氏、中:ウェクスラー教授、
左:野町

ンキェビッチ、トーマス・シュトルツといった著名な言語学者を巻き込んだ論争になったことは有名で、学界ではこの説が支持を集めているとは言えませんが、この説によってウェクスラー教授は言語学者のみならず、歴史家、思想家やジャーナリストなどにもよく知られるようになりました。近年ウェクスラー教授は新しい資料で補い、時に訂正しながら、ますます自説を強化されているようです。

今回の特別講演もその趣旨に沿っており、講演題目は「スラヴ語派への新候補となる3言語: イディッシュ語、ヘブライ語、エスペラント語。そしてスラヴ語派から外されるべき言語: 古代教会スラヴ語」という挑戦的なものでした。この「挑戦状」に応えるべく、コメンテーターに

は外国人研究員のアンドレイ・ダニレンコ氏をお迎えしました。

講演では、言語接触の結果として、文法構造は大きく変わらないが基礎語彙を含めた非常に多くの語彙が別の言語の語彙に置き換わる「再語彙化(relexification)」という概念を用い、その裏づけとしてユダヤ人の移動の歴史を踏まえながら、イディッシュ語がスラヴ語であることを論じられました。

ウェクスラー教授は専門が異なる方の出席を前提に、非常に丁寧にかつ平易に説明してくださったこともあり、講演会は充実したものとなりましたが、残念ながらやや時間不足でも



講演するウェクスラー氏

ありました。「古代教会スラヴ語」をスラヴ語から外すべきという点には全く触れる時間が無かったため、幾分「迎撃体制」にあった私としましては、やや「不発」の感が残りました。

私はイディッシュ語に関する知識が乏しいので、教授の説の妥当性がどれだけのものか正直わかりかねますが、講演会に準備して望んだダニレンコ氏の鋭い質問にも全て反駁されるなど、ウェクスラー教授が展開される持論は興味深いものであり、少なくとも講演会の間は、聴衆の多くを教授の世界に引き込んでいたことは間違いありません。

講演会の後でおこなわれた懇親会において、ウェクスラー教授は「今回の話の続きをしに来年も来札する」と約束されたので、次回の講演会も期待されるところです。[野町]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 118 号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE 研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

- 8月10日 P. ウェクスラー (テルアビブ大、イスラエル) “Three New Candidates for the Family of Slavic Languages: Yiddish, Israeli Hebrew, Esperanto; and One Less: Old Church Slavonic” (センターセミナー)
- 9月3日 科学研究費基盤 B「近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史」・新学術領域研究共催「比較帝国史研究会」 池田嘉郎 (新潟国際情報大)「共和制の帝国：ソ連に帝国論を適用するための試論」;山室信一 (京都大)「国民帝国としての日本」
- 9月10日 塩原俊彦 (高知大)「ロシア経済危機への国家支援策：ミクロレベルの分析」(センターセミナー)
- 9月16日 水谷裕佳 (北大社会科学実験研究センター)「国境地域に暮らす人々：米国・メキシコ・カナダの先住民」(GCOE-SRC ボーダースタディーズ・セミナー)
- 9月17日 A. ファヴェル (UCLA、米国) “Trans-border Migration and Social Change in Europe” (GCOE-SRC 特別セミナー)
- 9月28日 坂中紀夫 (神戸市外国語大・院)「セルゲイ・ウヴァーロフにおけるナロードノスチの概念について」(鈴川・中村基金奨励研究員報告会)
- 9月29日 S. アバシン (民族学・人類学研究所、ロシア)「タシケントの弾圧犠牲者博物館：帝国史・ソ連史のウズベクの説明 (ロシア語)」(センターセミナー)
- 10月8日 S. アバシン (民族学・人類学研究所、ロシア)「エトノス [民族] に関するソヴィエト理論 (ロシア語)」(特別講義)
- 10月14日 D. コヴォージェイチク (ワルシャワ大、ポーランド) “Max Weber and the Crimean Tatars: What Can We Learn Today from the Experience of the Early Modern Steppe Diplomacy?” (GCOE-SRC セミナー)
- 10月15日 三村光弘 (環日本海経済研究所 :ERINA)「北朝鮮をとりまく境界線：中朝・中ロ国境と軍事分界線」(GCOE-SRC 特別セミナー)
- 10月19日 A. ゴーリン (オックスフォード大、英国)「境界を越える感情 (18世紀末～19世紀初頭のロシア貴族の感情世界のヨーロッパ化) (ロシア語)」(センターセミナー)
- 10月20日 中地美枝 (北大文学研究科)「戦争・国境とジェンダー」(GCOE-SRC ボーダースタディーズ・セミナー)
- 10月22日 文学研究科・スラブ研究センター共催特別セミナー L. ラフォルト (ザグレブ大、クロアチア)「文学人類学への招待：学際的研究の方法論 (英語)」

中国研究者がロシアの農村で考えたこと

田原史起（東京大学大学院総合文化研究科）

中国農村を対象としたコミュニティ研究者として、筆者は北京、山東、江西、甘粛の各省に「固定観察ポイント」を築いて、そのおなじポイント（村）を繰り返し訪問することによって、それぞれのコミュニティが過去において、また現在、どういう問題に直面しつつあるのかを観察してきた。外部からみればとても地味で目立たないが、その場で日々生活するものにとっては非常に重要な問題群、すなわち「コミュニティ・イシュー」と呼ぶべきものを研究の主軸に据



ズナーメンカ郡スホチンカ村の教会

えたとき、それは優れて「比較」に馴染みやすい課題となる。とりわけ、コミュニティが地域特有の問題に直面し、対処していくとき、現地住民たちの問題への対処の仕方や問題解決能力に差があるのは何故か？というのがポイントである。こうした問題意識で、村有野菜卸売市場の設立（北京）やミクロな灌漑施設の維持管理（山東）、あるいは毛細血管のような村落道路の建設（江西）などをトピックにして、比較の視点から中国の研究を進めてきた。では、同じアプローチでロシアの農村に向き合ったとき、そこにはどのような特徴が見いだされるのか。

「抽象的な土地」と「即物的な土地」

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の一環としての筆者の調査旅行は2009年9月の前半に実施された。9月1日、成田で松里公孝教授と合流し、飛行機の中でロシアについて色々和ブリーフィングをしてもらう。モスクワに着いた当日の夜行で、一つ目の調査地であるタンボフ州に向かう。翌朝到着したと思ったら、すぐにタンボフ大学の学生との交流やら地元テレビへの出演などがあり、そうした活動をこなしてようやく、9月3日にズナーメンカ郡に入った。ここでは、「中国でいつもやっているように村に定住したい」という筆者のリクエストは結果的に叶えられず、郡庁所在地に宿をとることになった。そこから毎日、郡内の村々を郡役所の車で走り回って、村ソビエトで聞き取りを繰り返すスタイルになった。

車で移動する際、車窓には平坦な農地が果てしなく拡がっていた。作物の刈り入れは終了していて、畑にはまったく人影もない。路面はよく整備されているとは言い難かったし、車も古ぼけた普通の車だったが、運転手の前のメーターをときどき覗き見ると、我々の移動中の「平均速度」は時速120km程度であった。そもそも信号機というものがなかったので、一つの村に着くまでまったくストップする必要がない。信号機が無いのは、土地にたいして人口が圧倒的に少ないからだろう。人口稠密で農地が稀少な東アジアの農村とは、前提のまったく異なる世界に来たのだ、という感慨が湧いてきた。

村ソビエトに着いて農業の概況などについて聞いてみると、どうやら現地には、中国では普遍的な存在である小農（peasant）というものがおらず、かわりに大規模な数世帯の農業経

営者 (farmer) がほとんどの農地を営んでいることが分かった。村落の住民はといえば、集落からほど近いところに家庭菜園を分与されている。「家庭菜園」というと、箱庭のような小さいものが思い浮かぶが、実はこの農地から上がる収穫だけでも十分に食っていける程度の広さがあるという。ファーマーや農業企業は、コルホーズ時代の農地と大型農業機械を引き継いで営を行うが、住民はこの農地について、ただ抽象的な取り分としての「パイ」を分配される形となっている。1パイはおおよそ10haという単なる「面積」あるいは「数字」であって、住民は実際にどこかの区画を分与されているのではない。だがそのパイに応じて毎年、ファーマーから食糧や現金や家畜の飼料を受け取る。何故「パイ」なのかといえば、ロシアでは広大な農地の一区画を区切って家族経営にされても、逆に困ってしまうかららしい。中途半端な大きさの農業機械を各世帯で使用しなければならず、非常に経済的でない。これだけ持て余すほどに広い土地があれば、大規模機械でまとめて一気に耕作する方が効率的、というか、それしかやりようがないのであろう。だから、一般の住民は家庭菜園だけあれば十分なのである。いつかある研究会で、著名なロシア研究者の方が「ロシアでは土地を所有することは逆に危険である」とコメントされていたのを聞いて、妙に印象に残っていたのだが、ようやくその意味するところが飲み込めた気がした。

ロシアの土地所有が抽象的な面積としてのパイの所有であるとするれば、中国では土地・農地は非常に具体的かつ即物的なかたちでの所有である。共産党の土地革命が成功したのは、この農民 (peasant) たちの土地に対する即物的な愛情を組み込んだ形で、全ての農民がコミュニティの農地を、小さいながらも「実際の区画として」所有できるようにすること、を政策の主軸に据えたからである。農業集団化と人民公社化はこうした農民の欲求を行政力で抑えつけた側面があるが、1980年代初頭に人民公社が解体されると、土地は「ファーマー」に委ねられることもなく、極めて均分主義的な原則でふたたびコミュニティの各世帯に分割されたのである。

都市と農村の「やさしい」関係

もう一つ、中国農村との対比で印象的だったことは、ロシアの都市と農村との間にある、ある種の「やさしい」距離感である。都市が農村を一方向的に搾取するのではなく、相互浸透する関係とでもいえようか。

別荘 (ダーチャ) 文化はこうした関係をよく物語る。ロシアの都市市民は、金持ちに限らず、農村部に別荘を持つ習慣があるというのを初めて知った。ズナーメンカ郡のスホチンカ村は、タンポフ市街まで続く森が始まる場所で、郡の中ではタンポフに最も近いが、人口が流出して多くの空き家ができています。これらの空き家とその敷地は、300以上を整備して別荘用地としている。実際に、既にここに定住してタンポフに通勤する若夫婦がいるという。都市の住宅事情も絡んでいるのかも知れないが、実際に田舎に住んで家庭菜園を楽しんだり、時には自分の手で別荘を建ててしまい、週末や休暇をそこでゆっくり過ごしたり、という生活の質をゆとりの中に見いだす姿勢には、やはり文化としての奥行きを感じずにはおれない。ダーチャは都市市民が田園生活を楽しむ文化と結びついており、農村的なものを基本的には「後進的」として忌避する中国の発想からは生まれてこない行動パターンである。中国でも最近では都市市民の「農村観光」が流行しているが、これは単にレジャーの一家として農家の家屋で素朴な昼食を楽しむことを主旨としたものである。

さらに、農村内部に「スペシャリスト」と呼ばれる人々—その多くは高等教育の卒業生—が定住していることも、都市と農村のやさしい関係を物語る。教師、医師、介護士、機械技師、会計、図書館司書、文化宮殿職員、郵便局員などであり、農村の、しかも村レベルにこれだけの高等教育卒業生を受け入れる職場が創り出されているのが驚きである。一部の大学進学

者は、地元農村の職場に戻ってくることを条件に、州の予算で大学教育を受けている。地元出身者に限らず、スペシャリストはどんどん村レベルに配置されてくる。村長さんの多くも、村外の出身であったり、都市で高等教育を受けたスペシャリストである。

こうした結果、農村の文化水準は高くなる。ズナーメンカ郡は人口19000人の小さな郡で、中国でいえば「郷・鎮」くらいの人口規模でしかないが、スポーツや音楽、美術など実に様々な文化活動が行われている（松里先生によれば、



アレクサンドロフカ村博物館の展示の一部。村民の中の戦没者写真コレクション

タンボフ州はロシアでも特別な例らしいが)。9月6日の夕方には郡の博物館のホールで、我々二人のためだけにミニ・コンサートが催された。これはすばらしく贅沢な体験であった。農村に限りなく近い郡庁所在地にこれほどの音楽サークルが存在していることは、それだけの人や情報や文化が農村に留まる仕組みがあるということである。9月5日に訪問したアレクサンドロフカ村の博物館長ボンダリョフ氏は郷土愛にあふれた村史の研究者であり、村の歴史を熱っぽく語って止むことがなかった。村民の家庭で発見された歴史や民俗の資料は、必ず彼のところに運び込まれ、価値があるかどうか鑑識を受けるのだという。

なぜロシアの都市＝農村関係が「やさしい関係」として印象に残ったかといえば、中国ではそうでないからである。中国では、そもそも農村出身者の大学進学率はかなり低い。高等教育を受けた農村出身者は、社会のエリートと見なされ、基本的には「村」に帰って来ない仕組みになっている。むしろ、汚くて苦しい「村」から逃げたすために高等教育を受け、都市のホワイトカラー職や国家機関に就職し、都市戸籍を獲得して都市に永住する、というのが農村出身者にとって理想的なライフ・コースとなっている。いきおい、農村に人材は残らない。農村内部に大学卒業生が就業することの可能な、「スペシャリスト」向けの仕事が限られていることも関係しよう。都市が農村を経済的・人的に収奪する、「きつい関係」が特に近代以降の中国の都市＝農村関係を特徴付けている。いま、「三農問題」の重視だの、「和諧社会」の建設だのがいわれているのは、従来の両者のあまりに「きつい関係」を少しでも和らげようという反省に立っている。

高等教育を受けない若者はやはり都市に出るが、それは出稼ぎ者として沿海部の都市、あるいは内陸の中心都市に出て、肉体労働に携わるためである。高等教育を受けていない者がホワイトカラーとして都市の正規部門に入ることは難しく、都市における出稼ぎ者たちは、都市に何年住んだとしても「二等市民」でしかない。身体を使った労働なので、40代ともなれば体力的にきつくなり、農村に帰郷して地元で生きる道を模索せねばならない。

総じて、中国農村が「構造的弱者の吹き溜まり」である度合いは、ロシア農村よりも高い。ズナーメンカと同程度の人口規模の中国の郷鎮政府所在地の人民生活を思い出すと、いままでは「そんなものだろう」と思っていたのだが、その物質主義的な即物性に改めて愕然としないわけにはいかない。村レベルにおいては物質主義の要素は少し減るが、人材の流出はやはり甚だしい。特に中国の村レベルのリーダー層はほとんど土着の人材で、ロシアのように都市の経験をもっていない。コスモポリタンのな中立性に欠けるので、地縁、血縁、派閥な

どを契機としたローカル・ポリティクスが村レベルに生まれやすい。

ズナーメンカ滞在の最後には、お世話になった郡役場の人々が、美しい湖畔でバーベキュー・パーティーを開いてくれた。ウォッカで火照った身体を、郡議長らと一緒に湖水に飛び込んで冷ましたのも忘れ得ぬ思い出である。

生真面目なロシア人と腹芸の中国人

さて旅の後半、9月10日から滞在したのは、タタルスタン共和国の首都、カザンから車で1時間ほど離れたカムスコエ・ウスチエ郡チンキ村であった。タンボフでの調査が行政主導で、郡の役人たちの同行で村々を「広く浅く」駆け回る調査であったのに対し、後半は限られた日数ではあるが「一村定住型」の調査であった。その代わり我々は、行政の力に頼らず自分たちで調査を進めなければならなかった。しかも、ホームステイ先のホフロフ家は、行政とは縁もゆかりもない、ボルガ川での漁を生業とする家庭であり、村内における交友関係もあまり多くなさそうであった。

初日は村中を散歩して集落全体の位置関係を把握したあと、二日目、松里先生の意向もあって、村ソビエトを突撃取材することにした。村長のステパーノフ氏は、事前の紹介者もなく突然訪れた外国人に驚いたようだった。が、「ロシアは上意下達のピラミッド体制なのだから、こういうのは困りますよ」とぼやき、本当に困ったように「ふーっ」とため息をつきながらも、我々のインタビューを受け入れてくれたのである。そればかりでなく、細かい数値やデータが必要になると、何度も秘書に命じてパソコンからデータを呼び出してプリントアウトしてくれる。門前払いどころか、アポをとった普通のインタビューよりもむしろ親切なほどである。

その後のチンキにおけるインタビュー調査は、いずれも偶然の出会いを利用し、カムスコエ・ウスチエ郡の郡長さんを始め、すべてノーアポか直前のアポで実現したものだ。それらはすべて、ロシアでのインタビュー活動に熟達した松里先生の一瞬一瞬の判断が実を結んだものである。お陰でとても充実したフィールド調査となったが、同時に、もしも同じことを筆者が中国で試みたならば必ず失敗するだろう、という感慨もひとしおであった。

中国はある意味、強烈な「関係主義社会」である。個人と個人は何らかの共通項を媒介として、顔と顔でつながっていくが、そうしてつながっていくことは、かならずしも集団全体としての「まとまり」を生み出すものではない。顔でつながった関係の内部には、濃淡は様々だが信頼関係が存在しているが、私的関係の外部—あえて「公共領域」と呼ぶこともできよう—に対しては、不信感、冷淡さ、無関心などの態度が現れてくる。ある村のリーダーや一般村民にインタビューをするとしたら、行政のルートでタテ方向に下りていくか、友人・知人関係で横方向に紹介してもらうかである。飛び込みで、万が一、インタビューに応じてくれたとしても、相手は煙草など吸いながら、目は虚ろに宙を泳ぎ、限りなく曖昧な、無責任な返答に終始するであろう。いずれにしても満足のいく答えをしてもらうためには、何度も通って実際にその相手と親しくなる必要がある。緊密な個人的コネクション無しでは、価値のある情報は獲得できないのが中国社会である。

どうやらロシアではそうでもないようで、情報は赤の他人にも平等なかたちで公開されているかのようだ。相手の質問に生真面目に、できるだけ誠実に答えようとする姿勢は、前半のタンボフの人々から感じていたことだった。案外、こういうところから、それぞれの社会の構成原理のようなものがよく見えてくるものである。

上級の「代理人」としての村

それでは、ロシアの農村住民にとり、「コミュニティ」はどのような意味を持っているのだろうか。これは今回の旅の中心テーマでもあった。筆者が特に注目しようとしたのは、村レベ

ルのコミュニティや村ソピエトの働きだった。

ズナーメンカ郡各村やチンキ村でのインタビューで判明したのは、連邦レベルや州・共和国レベルに、かなりの「財政力」があり、コミュニティにとって喫緊の問題も、住民やリーダーの「自力更生」によってではなく、たいがいは上からの補助金によって解決されている事実だった。そうであるとすれば、コミュニティ自身の内在的な条件の違いは、直接的にはガバナンスの質に影響を与えない可能性がある。

具体的にいうと、最も頻繁に話題に上った重要なインフラとして、天然ガスのパイプ敷設問題があった。ガス化がなされる以前、冬の暖房は薪に頼っており、朝5時に起床してベチカに薪をくべ、暖まるまでには大部時間がかかったという。気温は零下40度まで下がることもあるので、住民生活の改善にとって最大の問題が暖房であったのもうなずける。タタルスタンでは、ガス化はほぼ10年前に完了しているが、当時の住民負担はほぼゼロで、すべてが共和国財政から支出されたという。チンキ村で当時村長であったサイノフ氏によれば、全村のガス化は、



チンキ村のもと村長、サイノフ氏と

村内のテリトリーを分割して、6社の請負業者に工事を委託し、それぞれが郡と契約を結び、工事を進めたという。設計が途中まで進んだところで、共和国側の思惑でガス管が地上型から地下型に変更されるなど、終始、プロジェクトは共和国、そして郡の強いイニシアチブで進められたようである。村の役割は、末端での工事業者との連絡・調整という、共和国や郡の「代理人」としてのものだったようだ。前村長のフィティホフ氏を訪問した際、彼が在任であった期間中に成し遂げた仕事について聞いたが、投入費用の大きな「功績」についてはすべて郡より上のイニシアチブで、上の財源を用いて始められており、その際の村長らの「功績」とは、やはり上の要請に応じて実施レベルで、実務家として働いた、ということであった。村長ら自身がイニシアチブを取ったのは、道路脇の泉から飲み水を汲みやすくするために屋根と壁を付けるなど、投入金額の非常に小さい項目についてのみだった。

そもそも、ロシアの村が「地方自治体」となってから、税源が保証されたかわり、村レベル自治体の財政力では明らかに実施できない業務、たとえばインフラ整備のような領域があることが、自治体自身にとってもはっきりと見えてきたわけである。前村長が述べた言葉を借りれば、「現在のシステムは自主性が高まった反面、村レベルではいつも危機的状況となっている」のである。村レベルのリーダーは、自らのイニシアチブを發揮して新しいことを始める余地は小さく、その代わり、州や郡がイニシアチブを取って始めた事柄について、上と密接な連携をとりながら、その末端における実施機関として働く側面が強くなっているようだ。ロシアの「村」レベルは、すぐ上の郡との関係が密接で、さらに財政的には州レベルや連邦レベルに依存せざるを得ない位置づけにある。村長を郡に集めての会議は、週1回という頻度で開かれるという。また筆者らがカムスコエ・ウスチエの郡長と知り合うことになった、郡長を交えての住民集会も半年に1回ずつ開かれる。これだけ頻繁に郡長と接触しては、村リーダーの側も郡の意向を無視して独自に行動することは難しいだろう。

以上のような印象を受けたのは、もちろん、筆者のフィールドである中国のコミュニティ・

イシューが、村レベルや、さらにその下の村民小組レベルや集落単位の自助努力に委ねられる度合いが高いからである。伝統的に「天は高く皇帝は遠い」中国では、上級政府からの政治的干渉は基本的にピン・ポイントである代わりに、財政的な面でも政府からの補助金は重点投入方式で、したがって「重点」以外の村は「自力更生」で何とかしなければならない。そこで逆に、コミュニティ・リーダーのイニシアチブや、コミュニティ内部資源の動員が、コミュニティの命運を分ける重要な条件となりやすいのである。実際に、コミュニティ共有財産の豊富な沿海部のコミュニティと、そうでない内陸部のコミュニティでは、平均的な財政規模に十倍程度の開きがある。

ここで動員される「資源」とは経済的なものに限られない。ロシアでは今回訪問したどの村でも「年金生活者」が住民人口のかなりの部分を占めていたが、中国の農村にはそもそも年金制度が存在せず、老人の扶養は息子や娘たちの間で分担されている。そこで、老親の扶養義務を履行しない子供たちに対しては、コミュニティの側がそれを「親不孝だ」と指摘することで世論圧力をかけることになる。コミュニティが共有する「規範」という資源が動員されることで、老人扶養問題は国家の年金に頼ることなく解決される、ということである。

旅の終わりに

こうしてみると、ロシアでは、少なくとも中国的な意味合いでの「コミュニティ・ガバナンス」は存立の基盤を持たないように見える。土地と農業の縛りから自由であり、都市との相互浸透がみられ、文化レベルが高く、コスモポリタン的人材が豊富で、教会があり、政治的・財政的には政府に依存するところの多いロシアの農村コミュニティは、実際のところ、どのようなガバナンスを展開しているのだろうか。

あと一週間ほどチンキ村に滞在できれば、その一端が垣間見えたかも知れない。が、残念ながらここで時間切れである。9月14日の昼食後、我々はカザンからの迎えの車で村を後にし、当日の夜にはもうモスクワ行き夜行で車中の人となっていた。

今回、「前提」のまったく異なる世界に飛び込んだことで、逆に中国や日本など、アジアの農村を成り立たせている「前提」が余計クリアに見えてきた気がした。そういう意味では比較研究の醍醐味を味わわせてもらったことになる。はやくも「次の比較の旅は何処へ…」などと、ウォッカで意識がかすんでいく頭で考え始めるのである。

<編集注1> 田原氏の調査結果は、12月12～13日に法政大学で行われる新学術領域研究の国際シンポジウムでペーパーとして発表されます。

<編集注2> 松里氏は、「ユーラシア地域大国比較」の趣旨に沿って、ロシアで現地調査を希望する中国、インド、トルコなどの専門家に通訳として最大2週間奉仕する活動を展開中です。来年夏のロシアでの現地調査を希望するロシア専門家以外の研究者は、松里氏に研究計画を提案してください。

スラブ研究者が甘粛で考えたこと

松里公孝（センター）

この8月、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の一環として、中国のイスラーム調査を行った。もともとはウルムチに行くつもりで現地の同僚と連絡をとっていたが、7月の暴動のため計画を変更せざるを得なくなった。華東師範大学のネットワークに頼って急遽、約200万人の回族が住む甘粛省の社会科学院の若手研究者である馬東平さん（ご自身も回族）を紹介してもらった。

8月13日の夜遅く、省都蘭州から70キロも離れたところにある空港に着く。市の中心部

まではバスで、その後はタクシーで馬さんが予約してくれた交通大学のホテルまで行く。すでに夜中近くであり、タクシーに乗るのも怖い時間である。交通大学が市の西端にあるのでなかなか着かない。後部座席で「中国は治安が悪い国ではない」と自分に何度も言い聞かせる。翌日わかったことだが、蘭州市の旧市街（城関区）は市の東部にあり、両側から山が黄河に迫っているの、市は黄河にへばりつくようにして西に向かって細長く発展したのである。黄河は本



臨夏の美しい中国式モスク、老子子

当に黄色い。両側の山並みのかなり高いところに美しいモスクが多く立っている。これは悲しい歴史の名残で、川べりの良い土地は漢族が占拠し、回族は山に追いやったからこうなったようである（ドゥンガン反乱の懲罰というわけでもないらしい）。

言うまでもないことだが、言葉がわからない国で現地調査をする場合、通訳の能力に決定的に規定される。通訳の労働時間が自分の労働時間であり、通訳の仕事の質が自分の調査の質となる。甘粛ではかなりラッキーで、馬さんの友人の有能な英語教師（同時に大学院で人類学の博士論文準備中である）が通訳になってくれた。英語圏に一度も行ったことがないのに英語が素晴らしく、しかも自分自身が敬虔なムスリムなのでイスラームの用語法にも通じていた。これがないとたとえ英語がうまくても役に立たない。ご主人も協力してくれ、しかもご主人は「中国の小メッカ」と言われる臨夏の出身なので、同市に遠征調査した際には家族ぐるみで助けてもらった。しかし若い女性なのでやはり体力的に私について来れず、また休暇中に乳飲み子と離れてアルバイトするのも辛そうだった。5日間一緒に働くはずだったが、3日半で彼女との協働は断腸の思いで中断せざるを得ず、最終日はホテルで資料を読んだ。東大の田原史起氏にも言われたが、中国人は朝 11 時半を過ぎると昼食のことで頭がいっぱいになってしまう（さすがに宗教指導者はそうではない）。自分が昼食を大切にすることはなく、私にも沢山食べるよう主張するので閉口する。私は、特に CIS や中国のようなトイレが完備していないところでは、現地調査中は何も食べないからである。

CIS 諸国と違って、中国では幹部と会うのは容易ではない。馬さんが自分の知り合いを通じて最大限努力してくれたが、結局、甘粛では共産党と省・市政府の幹部には会えなかった。会えたのは宗教指導者を組織する社会団体であるイスラーム協会（伊協と略称される）の幹部であり、そのほかはイマームやシェイフなど在野の宗教指導者と会ったので、政治学というよりもやや文化人類学的な調査となった。8 月末に ICCEES 訪中団の一員として北京を訪問した際（本号別稿参照）には、中央民族大学の指導的教授で、回族や中国ムスリムの全国的なリーダーのひとりであり日本とも縁が深い胡振華先生に助けてもらったので、回族が多く居住する北京市海淀区政府の宗教局幹部と会うことができた。

着いた翌日の 8 月 14 日、馬さんに案内され、旧市街にあるあるモスク（中国語ではイスラームは清真教、モスクは清真寺という）を訪れる。これは、1937 年、日本軍の攻撃を逃れて河南省から移住してきた回族が創設したモスクである。したがってかつては河南清真寺と呼ばれていたが、様々なムスリム移民が流入してくるこんにちの蘭州にはそぐわないということで、旅蘭清真寺と改称した。河南ムスリムの特徴らしいが、モスクの近くに支部としての婦



河南ディアスポラの婦人モスク管理委員会。向かって私の左が婦人イマーム

人モスクがあり、婦人イマームと呼ばれるリーダーまでいる。他のイスラーム諸国では、女性の礼拝スペースが同じモスクの吹き抜けの2階であったり、小さなモスクの場合にはカーテンで仕切っただけだったりするが、中国では婦人ムスリムの自立性が高く、モスクと同じ敷地内に小さな婦人モスクが建てられている場合が多い。しかし、別の敷地に経営的にも独立した婦人モスクがあり、婦人イマームまでいるのは、世界的にも稀に見る河南ムスリムの特徴らしい。もちろん婦人には教義上

礼拝を先導する資格がないので、礼拝だけは本モスクからの同時放送で先導している。なぜここまで婦人ムスリムの自立が認められるのかと質問すると、まずムスリム婦人は男の会話にずけずけ口を挟まないで、イスラームについて知りたいと思うことがあっても簡単に知ることができない。婦人の中にきちんと勉強した者がいれば、婦人の信仰生活は格段に充実したものとなる。もうひとつは、ムスリムが死んだ際には体を洗わなければならないが、当然、婦人の体は婦人しか洗えない。婦人モスクがあるおかげで、河南出身者でなくとも蘭州中のムスリムが女性の葬式をこの婦人モスクに頼むことになり、率直なところ、かなりの収入になるようである。

午後、蘭州市イスラーム協会の幹部にインタビューしてその日の調査は終わる。金曜日なので、共産党や政府の幹部に会えるにしても次週のことである（結局会えなかったのだが）。そこで土日は臨夏に行くことにした。蘭州から臨夏に行くには、ドンシャン（東郷）族（確か松本光太郎氏が研究していたように記憶する）が住む山岳地帯を越えなければならない。その山道の険しさは、この3月に南オセチアに行った際に越えたコーカサス山脈を思い出させた。それほど険しい山々が麓から山頂まで見事に段々畑になっている。雨さえ降っていれば世界遺産ものの美しい光景であろうが、いまや赤褐色の「段々砂漠」である。道路には、「全村退耕」して森に戻せという横断幕がかけてある。実際、かつて畑であったところどころに苗木が多く植えてある。経済成長で頭が一杯になっているように見える中国政府が環境問題にここまで取り組んでいることに頭が下がる思いがするが、失礼ながら、雨が降らないところどころにいくら苗木を植えても植えるそばから枯れているようにも見える。こうして追い出されたムスリム少数民族は、蘭州など大都市に流入するのである。

CISと同様、中国のムスリムの大多数はハナフィー学派である。中国内地、青海、中央アジアを結ぶバザール都市であった臨夏には、康熙帝時代にカーディリー派神秘主義が伝播した。今世紀に入ってからは、サウジアラビアからハンバル学派も伝播し、市には4つのハンバル派共同体がある。意外なことだが、ハンバルではなく「サラフィー」を公式の名称としている。さらに意外なことだが、中国当局から迫害も白眼視もされていない。甘肅のスーフィズムは独特であり、一人のシェイフが10人の弟子に免許皆伝（イジャーザ）することを原則としており、鼠算式にシェイフが増える仕組みになっている。甘肅で数千人のシェイフがいると本人たちは言うっており、確かに至る所に聖廟や飾り立てた墓がある。ちなみにムスリム人口が同じくらいのダゲスタンには16人しかシェイフがいない。

蘭州に帰って最後に訪問したのは、ドンシャン族やサルール族など蘭州に流入してくるムスリム移民の娘を教育するイスラーム女子学校(崇徳女校)であった。これは、回族のある社会活動家の婦人が校長となって、香港の基金から資金を調達して5年前に開校した学校である。移民は夜も昼も働いているので、学校の中には寄宿施設もあり、住み込んでいる子供もいる。そのわりには校舎は恐ろしく清潔で、匂いもしない。ドンシャン族は早婚であり、ティーンエイジャーでも乳飲み子を抱えて学校に来て



崇徳女校付属幼稚園。貧困と環境ゆえの難民の子供とは思えないほど清潔で快活である

授業にならない場合があったので、一石二鳥を狙って幼稚園(これは共学)も開設した。当初の理想は、生徒であるドンシャン族の中から生え抜きの教員を育成することであったが、5年たってもまだひとりしかその例はない。進んだムスリム民族である回族が遅れたムスリム民族であるドンシャン族などを助けるという構図は変わっていないのである。校長は、ドンシャン族の女子早婚習慣を改めなければ、皆、学業を途中で放棄してしまうのでどうしようもないと語っていた。

*

*

*



バイク・タクシー。ヘルメットをかぶらないので利用するのはとても怖い

私が中国のイスラームを研究しようと思ったのは、イスラーム宗教組織論の観点からである。世界的には、ムスリム管理機構はアラブ型(宗務ワクフ管理省)とトルコ型(宗務局)とがある。旧オスマン領(ボスニアも含めて)では概してトルコ型が優勢であり、また旧ロシア帝国領でも、エカテリーナ2世時代にオスマンのシェイヒュルイスラーム制を模倣して宗務局を導入して以来、トルコ型が優勢である。中国の宗教管理機構はそのどちらにも入らない。これはイスラームに限らず中国の他の宗教にも共通だが、中国共産党には統一戦線部、政府側には

宗教局という宗教管理の指揮系統がある。宗教者はイスラーム協会(伊協)、カトリック(天主)協会などの社会团体に組織されるが、党や政府とは対照的に、これら協会の各級間に位階制はない。つまり、蘭州市や臨夏市の伊協は甘肅省伊協に従属するわけではなく、同様に甘肅省伊協は全国伊協に従属するわけではないのである。もっともイスラームの場合はファトワ(法学裁定)を出す必要に迫られる場合があり、それは全国伊協の「シャリヤー解釈最高委員会」が行うが、総じてイスラームの内部自治的な位階制は存在しないと考えてよい。ソ連がロシア臨時政府や帝政からモスクワ総主教座やムスリム宗務局を継承し、各宗教の位階制(すなわちオートノミー)を形式的には保障していたのと比べ、この点では中国の全体主義・社

会の原子化はより徹底しているとみなすことができるのである。

なぜこのような特徴が生まれたかといえば、おそらく、清朝や民国期にムスリム管理機構がなかったからだと思う。共産党政権が白紙から宗務管理機構を作らなければならなかったので、「統一戦線部」などという現世的な機構の中に宗教が組み込まれてしまったというのが私の仮説である。実は中国西北部では、スーフィー内の上下関係を背景として通常寺の上級機関としての「海乙寺」というものが最近まで残存していた。しかし、こんにちのムスリム共同体模範定款は、モスクはその管理委員会（信徒代表）にのみ従属するものと定め、モスク間の主従関係を排し「海乙寺」を一掃してしまった。中国のモスクには必ず「管理民主」というスローガンが張っており、「民主」と言う聞こえは良いが、実際の狙いは宗教の位階制（内部自治）を許さないということである。



北京市海淀区の馬甸清真寺にてイマームおよび胡先生親子と。商業の中心地にあるため、檀家が300家族しかない割には非常に豊かなモスクであり、イマームが4人いる。私の目の前でも、百元紙幣の厚い束を喜捨する信者がいた。ただし胡勇氏によれば、回族は来世よりも教育にもっと金をかけるべきとのことである

は「和諧社会」などの世俗政府のスローガンが似非宗教的な解説付きでべたべたと貼ってある。これはスティーヴン・コトキンが昔から指摘している、全体主義ゆえのパーゲニング資源というパラドックスである。つまり全体主義社会で国策に協力するような建前を積極的に言えば、民主主義社会で白眼視される独立勢力であるよりもかえって権力から自由でありうるのである。ここで中国を全体主義と呼ぶのは、言論の自由をはじめ人権が著しく抑圧されているという意味ではなく、中央政府のスローガンがいまだに人民を動員する力を持っているという意味である。

実際、今度初めて北京・上海以外の中国地方都市に行ってみて、未だにあらゆるところにスローガンが掲げられているのに驚いた。やはり北京・上海は中国ではない。しかし、「和諧社会」のような政治的意図見え見えのスローガンが多数だとは思わない。私の印象では、一番多いのは「文明」にまつわるスローガン、第二に多いのは「科学技術を学べ」というスローガン、「和諧社会」はずっと劣ってせいぜい3番目である。「文明」標語が量的に他を圧倒するのは簡単な事情で、道路わきやトイレに大量に掲げてあるからである。公衆トイレにはほとんど便器ごとに「文明的に使え」と貼ってあるし、おそらくニール・アームストロング船長の台詞をもじって、「便器への一歩は小さいが、文明に向かっての偉大な一歩である」というスローガンがトイレにでかでかと貼ってあるのを見ると思わず嘔き出してしまう。道路の

だからといって中国のムスリムがCISのムスリムに比べて不自由だというわけではない。ロシアでは、第2次チェチェン戦争を転機として1990年代のイスラーム放任主義が反省され、サラフィー主義はダゲスタンでは非合法化され、アラブ諸国でイスラームを学んだ者はFSBの監視対象とされ、国家がマドラサのカリキュラムに介入するようになった。このいずれも中国では起こっていない。すでに述べたようにサラフィー主義への差別はなく、外国でイスラーム高等教育を受けることは依然として奨励され、国家はマドラサの教育内容に干渉しない。そのかわり北京を一歩離れると、モスクの壁には

脇には、「文明的に運転せよ」と掲げてある。誇り高い中国人が、「自分たちのマナーはまだ文明的ではない」と認めるスローガンをあちこちに貼るのは奇妙である。ロシアなら、「礼儀正しく運転せよ」という標語はありえても、「文明的に運転せよ」というのはありえない。中国民衆にとっての「文明」は、衛生や産業社会に必要な行動規範という意味だけではなくて、おそらく先進国の中間層程度の生活水準に追いつくイメージと結びついており、それだけに人気があるのだろう。「科学技術」も同様である。

8月末に ICCEES 代表団の一員として北京を訪問した際は、中央民族大学の胡振華先生に朝から晩まで付き添ってもらい全面援助を得たので、短時間で大量の資料を仕入れることができた（手続きの段階で華東師範大学の楊成氏と北大院生の劉旭氏に助けってもらったことは記す義務がある）。胡先生とは2年ほど前に私が中央民族大学でレクチャーした際に知り合ったが、その後、来札の際に北海道スラブ研究会で講演をお願いしたことがある。前述のムスリム共同体模範定款の起草者の一人といえ、その影響力がわかるだろうか。午後、海淀区政府を訪問した際には、北京農業大学で副教授を務める末息子の胡勇氏まで動員して通訳をさせてくれた。日本で農業社会学を学んだ胡勇氏のおかげで、私は生まれて初めて自分の母語でインタビューした。前々から、胡先生が4人の子供をすべて日本の大学院に留学させたことや日本人に非常に親切なのはなぜかと思っていたが、今回、その事情を胡勇氏から聞いた。山東省出身の胡先生は、子供時代を日本占領下で過ごし、学校では日本語を学ばされた。自分はそのことが嫌ではなかったが、家族から「侵略者の言葉など学ぶな」と言われて悲しい思いをしたそうである。かつては遣隋使や遣唐使が中国に来て学び、いまでは多数の中国人留学生が日本で学んでいる。学ぶということを通じてこれほど深く結びついた国民はいない、自分は日中の架け橋になる責務があるとの思いで、精力的に働いておられるのである。上記の生い立ちから日本語は達者であり、またロシア語もうまい世代なので、コミュニケーションは楽である。

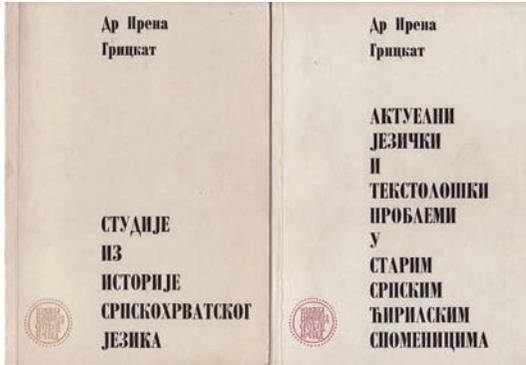
今回初めて調査目的で中国を訪問し、この国の学術的な価値を痛感した。12月の国際シンポジウムでの報告で、その一端が披露できれば幸いである。

セルビア科学芸術アカデミー会員 Irena Grickat-Radulović (1922-2009) を偲ぶ

野町素己（センター）

2009年はスラヴ語学研究にとって悲しみの多い年になった。1月7日にスラヴ語通時研究で大きな功績を残した Maria Brodowska-Honowska (享年 85)、2月7日にはポラブ語研究の大家 Kazimierz Polański (享年 80)、2月22日にはスロヴィンツ方言研究の大家 Ewa Rzetelska-Feleszko (享年 77)、そして6月5日にはスラヴィストでありロマニスト、また言語理論家としても著名な Stanislaw Karolak (享年 78) の訃報を相次いで聞くことになったのである。

そして4月7日、セルビア科学芸術アカデミー正会員 Irena Grickat-Radulović が他界した。Grickat は第2次世界大戦後のセルビア語研究を牽引してきた代表的な学者の1人であり、特にセルビア語の歴史的研究において数多くの業績を残した。私もセルビア語研究に携わり始めてから今日に至るまで、さまざまな場面で Grickat の著作を参照する機会があり、Grickat は私にとって憧れの存在であったとも言える。本稿では追悼の念をこめて、この偉大なセルビア語学者の足跡を簡潔に振り返ってみたい。



Grickat の著作

1922年、Irena Grickatはセルビアに亡命した白系ロシア人の家庭に生まれた。その苗字は非スラヴ系を思わせるが、実際Grickatの曾祖父はリトアニア人で、彼がペテルブルグに移住したときにGrickaitisからGrickatに簡略化したのだという。

1940年にベオグラード大学哲学部セルビア・クロアチア語・南スラヴ文学専修課程に進学し、第2次大戦をはさんだ後1949年に卒業、1953年に博士号を取得した。著名な言語学者Aleksandar Belić(1876-1960)の指導の下で書かれた博士論

文「セルビア・クロアチア語における助動詞を伴わない完了形式及び類似の現象について (O perfektu bez pomoćnog glagola u srpskohrvatskom jeziku i srodnim sintaksickim pojavama)」(1954、ベオグラード)は名著として知られる。この著作ではbiti動詞が省略される完了形式を統語および意味に分析し、その類型を試みたものである。文語と方言の豊富な用例を通時的および共時的側面から分析し、さらに他のスラヴ諸語との比較にも焦点を当てたこの著作は、現在も一定の価値を保っている。

1949年にセルビア科学芸術アカデミー付属セルビア語研究所にてBelićの助手として採用され、1969年まで研究活動に従事した。同期にはIvan Popović(1922-1960)、Pavle Ivić(1924-1999)、Milka Ivić(1923-)といった所謂Belić学派に属する優れた研究者がおり、彼らはGrickatとともに戦後のセルビア・クロアチア語研究の黄金期を担うことになる。代表的な成果として挙げられるのは、現在も刊行され続けている「セルビア・クロアチア文語・民衆語辞典 (Rečnik srpskohrvatskog književnog i narodnog jezika)」であり、Grickatは第1巻から編纂作業に参加し、編纂委員会の主要メンバーとして活動し続けてきた。セルビア語研究所を退職した後もJužnoslovenski filologやNaš jezikといったセルビア語研究所が刊行する主要な学術誌の編集委員を務め、また同誌に多くの研究論文を発表した。

1969年から1977年までGrickatはセルビア国立図書館にて主にセルビア語の古文書研究を行った。1977年に定年退職した後にセルビア科学芸術アカデミー準会員、続いて1985年には正会員に選出され、アカデミーの学士院辞典編纂部会、古代教会スラヴ語研究部会、語源研究部会その他多くの研究部会で指導力を発揮した。尚、1983年にはスロヴァニア科学芸術アカデミーの外国人会員にも選出されている。

Grickatは4冊の単著を筆頭におよそ250の学術研究を残した。中でもセルビア語の通時研究への貢献が際立っており、その関心の幅は音声学・音韻論から統語論までと極めて幅広い。研究テーマとして第3次口蓋化(例えば、Još o trećoj palatalizaciji // Južnoslovenski filolog 19, 1951)や動詞のアスペクト(例えば、O nekim vidskim osobenostima srpskohrvatskog glagola // Južnoslovenski filolog 22, 1957)といった、スラヴ語研究において長年議論されている諸問題を選び、それに正面から取り組んでいることも注目に値する。博士論文につぐ2冊目の単著「古期セルビアのキリル文字文書における現下の言語及びテキストの諸問題 (Aktuelni jezički i tekstoški problemi u starim srpskim ćirilskim spomenicima)」(1972、ベオグラード)はセルビアの古文書研究の課題と方法論を論じたもので、以後のセルビア語史研究の指針として、とくに統語論の歴史研究の発展に大きな影響を与えた。3冊目の単著「セルビア・クロアチア語史の研究 (Studije iz istorije srpskohrvatskog jezika)」(1975、ベオグラード)は歴史的統語論研究の傑作であり、接続詞daとštoの用法の通時的分析は特に興味深い。

本書の価値は現在でも失われておらず、2004年には復刊された。尚、いずれの単著も本邦では唯一、当センターの図書館が所蔵している。

Grickatには文献学研究の業績も多い。「ドゥシャン法典 (Dušanov zakonik)」(1975-1997、全3巻、ベオグラード)において展開されるGrickatの精密なテキストの分析と注釈は、多くのセルビア語およびその他のスラヴ語の古文書に通じていた彼女ならではの研究成果であり、セルビア言語・精神文化史において重要な意味を持っている。

この他Grickatの関心は、さらに詩作法や翻訳論に及び、自身も傑出した翻訳者であった。プーシキン、レールモントフ、バラティンスキー、チュツチェフ、ブロークといったロシア詩の古典作品の翻訳は、例えば「19世紀の詩作品より (Iz poezije XIX veka)」(1998、ベオグラード)で読むことが出来るが、これは韻律も原文に忠実であるなど、セルビア語とロシア語を母語とし、かつ双方の言語文化に精通していたGrickat以外には達成しがたい仕事であろう。

Irena Grickatは学閥を作らず、「弟子」と呼べる人間は1人も残さなかった。多くの言語学者と異なり、大学で教鞭をとることに関心はなく、また名誉を求めず、ただ与えられた場所で心に決めた研究に邁進した、孤高の研究者であった。国際的に活躍し「ノヴィ・サド学派」と呼ばれる構造言語学の学派を率いた同世代のPavle及びMilka Ivić夫妻に比べると幾分地味という印象があることは否定できず、またGrickatの研究の多くは主としてセルビアの学術誌に発表されたため、その名前は世界に広く知られているとは言い難い。しかしGrickatの著作を読んだ者は、世界的なIvić夫妻の研究に決して劣らぬ価値を見出すはずである。

Grickatの業績一覧(但し2002年まで)は、Lidija Jelićが編纂したBibliografija radova akademika Irene Grickat-Radulović u čast osamdeset godina života (2002、ベオグラード)としてまとめられている。また、次号のJužnoslovenski filologはIrena Grickat記念号になるということなので、2002年以降の業績はそこに掲載されることになるだろう。

残念なことに、Grickatはもはや手に入らない論集などに多くの研究成果を発表したため、その研究の全容を把握することは難しい。したがって、セルビア科学芸術アカデミーにはGrickat全集の刊行が期待される。

学 界 短 信

◆ ICCEES 執行部の幕張訪問 ◆

松里公孝 (ICCEES 日本代表)

さる5月30日、トロントで開かれたICCEES執行委員会は、2015年ICCEES世界大会の開催地として、東京幕張を推薦することを満票で決めた(ICCEES International Newsletter, No. 64 参照)。もちろんこれは執行機関としての提案であり、決定ではない。決定を下すのは、来年のストックホルム世界大会中に招集されるICCEES評議会である。しかしながら、ライバルであったグラスゴーが戦意を喪失してしまったため、評議会でのどんでん返しはあまりありそうにない。

私は、2007年以来、ヨーロッパ圏外なかんずく日本でのICCEES世界大会開催を提案してきたが、実は日本が正式に立候補したわけではなかった。私は、これまでの日本のスラブ研究の国際貢献度では世界大会など招聘する資格がない、東アジアでの地域コンフェレンスを成功させ、2010年ストックホルム大会に東アジアから多数の報告者が登録して初めて、アジ



エカテリーナ・エルスウォース夫人の日本文化体験、
着物、お茶、生け花・・・

ロシア認識を構築する必要性に鑑み、また最近の東アジアにおける研究者コミュニティ建設の進展に鑑み」幕張を2015年世界大会開催地として推薦するという動議が唐突に出され、満票で可決された。

これほどあっさり決まるとは私も含め日本の同僚は誰も思っていなかっただろう。やはりアジアに暮らしていると、世界大会を5回連続してバルト海沿岸の半径500キロくらいの円の中で開催してきたことに対する欧州の同僚の危機意識を過小評価してしまう。私たちのライバルであったブリテンのスラブ学会(BASEES)長であるテリー・コックス氏も、「日本が本気で手をあげたら勝てるわけがないよ」と言っていたと青島陽子さんから聞いた。仮想だが、世界大会を何回かアジアの都市の間でたらいまわしにしたらどうなるだろうか。その水準は、我々がやっている東アジア学会と同じ程度のもになってしまうだろう。実際にこれがICCEESの世界大会に起こりつつあることである。それははてきめんに北米のスラブ研究者コミュニティとの関係を疎遠なものとした。

ICCEES最大加盟組織であるAAASSは、ここ3年続けて代表がICCEES執行委員会を欠席している。2005年ベルリン大会にはロシア人が約170人、アメリカ人が約250人参加したが、この数はストックホルムに向けては見事に逆転した。アメリカからの報告登録数が170、ロシアからが250である。水準的には地域学会程度のもものために、アメリカ人は大西洋を越えようとはしない。

もう1回世界大会を欧州でやったら、ICCEESの権威は失墜すると(グラスゴーも含め)皆が思っていたのである。ICCEESの権威が失墜してもJCREESだけは安泰だと思っている日本人がいるとすれば、それはひどい勘違いであると言わざるをえない。

アに世界大会を招く資格が生まれると国内外で主張してきたのである。周知の通り、東アジア・コンフェレンスは大成功だったし、ストックホルム大会には日本から約60名、中韓から約50名が報告登録している(参加登録ではない、念のため)。さて、これでグラスゴーと同じ土俵に乗ることができた、何ヶ月間かのタフな戦いが待っているだろうと思いつながらトロントに行ってみると、あたりさわりのない議論ののち、「世界大会を5回連続欧州で開催したことの異常性に鑑み、欧州中心主義的でないスラブ・ユー



歓迎レセプションでキルシュボーム事務局長の誕生日を祝う。後ろは日本政府観光局の小堀コンベンション誘致部長

7月10日に開催されたJCREES幹事会は、私に、世界大会フィーズビリティ委員会を組織し、大会を成功に導くに足る財政的・組織的見通しを立てることを命じた。この委託を実行するため、2006年世界政治学会（福岡）の実行委員長だった現熊本県知事に会うなど様々な調査、また請願活動を行っているのだが、これまでの最大の仕事は、ICCEES幹部の訪日・訪中を実現したことである。幹部のうちジョン・エルスウォース会長とスタニスラフ・キルシュボーム事務局長の旅費は、国際会議誘致の一環として日本政府観光局の協力により、観光庁が負担した（通常、大会誘致・視察のためには1人しか幹部を招かないので、2人招いたこと自体、観光庁や観光局にとってのICCEESの破格の位置づけを物語っている）。トーマス・ブレマー副会長の旅費は、宗教学者である彼をたまたまロシア正教研究会に招く必要があったので、私の関連財源から出した。視察に伴う様々な文化行事の費用を負担したのは、千葉県、市、コンベンションビューロー、そして地元の有志である。

幹部のうちブレマー教授だけは早めに来日し、成田山新勝寺などを見学したのち、8月23日のロシア正教研究会に参加した。この研究会は、世界大会開催候補施設のひとつである幕張のOVTA（海外職業訓練協会）ビルで行われた。その夜にはエルスウォース会長、キルシュボーム事務局長も合流し、袴田茂樹JCREES会長がホストとなった夕食会が行われた。

翌24日は、大会開催候補施設である幕張メッセ、OVTA、神田外語大学（学長が直々に案内）を視察すると同時に、千葉県庁を訪問し、副知事と会った。副知事は、森田県政が成立してから自治省から移ってきた人らしいが、地図を見せながら千葉の地理条件と発展戦略について詳しく語り、プロトコル的な面談を予想していたICCEES側を驚かせた。エルスウォース会長は、彼の持論であるが、冷戦の際に西側が東側を研究するために生まれた組織であるICCEESが本当にグローバルな組織になるためには日本で開催される世界大会を成功させる必要があることを訴えた。会長の高邁なスピーチを受けて、私は、より俗っぽい、旧ソ連東欧研究は結果的には社会的アピール力を持つこと、また大会の成功のためには自治体からの財政的な援助が不可欠であることを訴えた。

その後、午後3時から観光局や千葉コンベンションビューローの代表も交えての世界大会に向けた実務者会議が、4時半からはICCEES幹部と研究者のみの学術的な交流会が行われた。過去の世界大会の組織経験をICCEES幹部の口から直接聞いたのは意義深いことであった。夜は、ホテル・ニューオータニのスカイラウンジで、千葉の実業界、学术界、国際交流団体を交えての豪華なレセプションがあった。千葉コンベンションビューローと私の打ち合わせでは、これは立食パーティーになるはずだった。しかし「指示が不徹底」で（誰かが立食パーティーなどともないと思ったのだろう）、琴のバックグラウンド演奏のもとフレンチとワインがふんだんにふるまわれた。キルシュボーム事務局長の誕生日だったのでサプライズで可愛いケーキが出されるほどの細心のもてなしであった。千葉はその本気ぶりを誇示したのである。東京で2000人規模の国際学会を開いても、都にとってもビジネスにとっても鼻くそのようなものだろう。その意味では千葉を選んだのは当たりだった。



間違いなく一生に1回しかない体験



日本で一番若い市長と

翌25日には千葉市庁を訪問した。熊谷千葉市長はこの春に民主党から当選した全国で一番若い市長で、千葉を国際都市・学術都市にするという自分の公約実現に貢献するという自分の公約実現に貢献するという自分の公約実現に貢献する ICCEES 世界大会に大きな関心を示した。この日の残りは盛りだくさんの文化行事であった。相撲部屋を訪問して稽古を見学したのは特に印象に残る体験であったようだ。プレマー教授の大学生の息子さんは、幕内力士と実際に相撲をとった。日本最後の夜は隅田川に屋形船を浮かべ、カラオケ大会

となった。ICCEES 幹部はカラオケの経験は全くなかったが、千葉コンベンションビューローのスタッフに乗せられるような形で、結局熱唱した。翌日は総括の実務者会議を行った後、成田空港に向かった。千葉コンベンションビューローは、この勢いで大会準備作業に突入する構えであったが、来年の幕張開催正式決定まではあまり動けないということがわかって、拍子抜けしたようだった。ストックホルムでは、(幕張大会は)「明日にでも出来る。しかしやっぱり5年待って頂戴」というのをキャッチフレーズにしようかと思った。

これまで私は、他の ICCEES 幹部と一緒に世界大会候補地・予定地であるリヨン、ストックホルムを視察したことがある。もちろん誘致する側が旅費を持つなどということは絶対はないし、会議の場所が正確に伝えられていなかったり、組織者の手際が悪くて鍵のかかったビルの前で ICCEES 幹部が2時間立たされていたりしたこともある。そんな怠惰な国民でも凶々しく世界大会を誘致するのはある意味では結構なことだが、日本人ほどの組織性やもてなしの心がありながら、それを国際貢献に生かしてこなかったとすれば惜しいことである。

8月26日には北京に飛んだ。ICCEES 中国代表になったばかりの鄭羽氏が秘書の女性と共に迎えてくれた。その翌日は、ICCEES 一行は万里の長城を見に行った。私は北京に残ってフィールドワークである(本号別稿参照)。28日の午前中が公式の会議である。まずホストである中国社会科学院ロシア東欧中央アジア研究所の指導部との会見があり、その後、中国スラブ学会(CAERCAS)の主要な中堅研究者(残念ながら北京在住者に限られたが)との内容豊かな懇談があった。使用言語は主にロシア語で、欧米人の ICCEES 幹部とロシア語で学問的な会話がができること自体嬉しいと中国側は言っていた。私自身、北京地域におけるスラブ研究事情をはじめ体系的に聞くことができ、大いに勉強になった。その日の午後は禁紫城を観光し、翌29日には我々は皆帰路に就いた。

この北京訪問は、ある意味では幕張視察以上に大切なことで、私は何としても実現したかった。というのは、昨年、李静杰会長がパスポート問題でストックホルムの ICCEES 評議会に出席できなかったために、中国スラブ学界の ICCEES 加盟は欠席裁判のような形で決まったのである(欠席裁判は、普通は「被告」として不利な判決が下されるものだが、この場合は逆)。その後も中国の同僚がなかなか電子メールに回答しないために、ICCEES と中国スラブ学会との協力は一向に具体化しなかった。これでは加盟した意味がない。

先に述べたように、ICCEES と AAASS の関係が思わしくないのが、東アジアは ICCEES にとって第2の拠点となりつつある。ICCEES 執行部にとっては、精力的でそれなりに学問的な水準も高く、ICCEES に忠実な東アジアが可愛くてしょうがないのである。ICCEES の幹

部が日本を訪問するのは2004年以來であるから5年ぶりであった。極東のスラブ研究者がICCEESを身近に感じるように、もっと頻繁に来てほしい。何とか予算を捻出して、執行委員のうち必ず誰かを、年1回の東アジア・コンフェレンスに招くようにしたらよいのではないだろうか。ちなみに来年3月のソウル・コンフェレンスには、ICCEES オセアニア代表であるグラーム・ギル・シドニー大学教授が出席し報告する。私は、彼にも帰路日本に寄ってもらいたいと考えている。

◆ 学会カレンダー ◆

- 2009年11月6-8日 日本国際政治学会研究大会 於神戸
 - 2009年11月7-8日 オホーツク海環境保全シンポジウム 於北大
 - 11月12-15日 米国スラブ研究促進学会 (AAASS) 年次大会 於ボストン
 - 12月12-13日 新学術領域研究第2回国際シンポジウム 於法政大学
 - 12月19日 GCOE スタートアップ・シンポジウム 於スラブ研究センター
 - 2010年3月4-5日 第2回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会 於ソウル
 - 6月5-6日 比較経済体制学会全国大会 於大阪市立大学
 - 7月8-9日 スラブ研究センター夏期国際シンポジウム
 - 7月26-31日 ICCEES (国際中欧・東欧研究協議会) 第8回世界会議 於ストックホルム
- センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。
[大須賀]

図書室だより

◆ マイクロ・リーダー・プリンタの更新 ◆

1996年度に導入した富士写真フィルム FDIP6200 マイクロ・リーダー・プリンタについて、メンテナンス担当会社より、今後部品の供給ができなくなるという連絡があり、後継機を検討していましたが、米国製フィルムスキャナ Scanpro 2000 を導入し、パソコンと接続して使用することになりましたので、お知らせします。

これによって、フィルムに記録された画像は、はじめからデジタル処理され、モニタに映し出し、あるいはプリントする以外に、USB メモリスティック等を持参いただければ、デジタル画像データとして受け取ることができるようになります。納品は、10月22日の予定です。
[兔内]

◆ 新聞バックナンバーの利用について ◆

耐震改修後の図書室では、収蔵スペースの不足から、新聞バックナンバーの相当部分を暫定的に外部の倉庫に預けています。

当該部分の利用については、事前の申し込みが必要で、出納に3日から1週間を要する状況です。ご不便をかけますが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。[兔内]

ウェブサイト情報

2009年7～9月までの3ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く）の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
7月	385,064 (12,421)	14,838 (479)	2,631 (85)	148,842 (39%)	184,535 (48%)	51,687 (13%)
8月	349,282 (11,267)	12,492 (403)	2,667 (86)	114,349 (33%)	175,751 (50%)	59,182 (17%)
9月	342,749 (11,819)	11,636 (401)	2,399 (83)	101,862 (30%)	169,273 (49%)	71,614 (21%)

編集室だより

◆ スラヴ研究 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第57号への投稿は9月末で締め切られました。14件の応募があり、2010年春の発行を目指して現在審査をおこなっています。[長縄]

◆ スラヴ研究センターレポート No. 4 ◆

「エネルギーの対口依存は危ういか？ 存在感を増すロシアの資源外交」

2009年7月22日に笹川平和財団との共催により東京で開かれたセミナーの記録です。このセミナーは、日本でも近年輸入が急増し、今後もさらにその増加が見込まれるロシアのエネルギーについて、その政治的、経済的安全性を議論したものです。[田畑]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/report/00index.html>

会議 (2009年7～9月)

◆ センター協議員会 ◆

2009年度第4回 7月28日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

2009年度第5回 7月30日

- 議題
1. 教員の人事について
 2. その他

2009年度第6回 9月25日

- 議題
1. スラヴ研究センター「境界研究」教育一般プログラム内規(案)について
 2. その他

みせらねあ

◆ 廣瀬陽子氏の著作が受賞 ◆

本センターの共同研究員・廣瀬陽子氏(静岡県立大)の著作『コーカサス 国際関係の十字路口』(集英社新書、2008年)が第21回アジア・太平洋賞の特別賞を受賞しました。[編集部]

◆ 人物往来 ◆

ニュース118号以降のセンター訪問者(客員、道央圏を除く)は以下の通りです(敬称略)。
[岩下/大須賀]

- 8月10日 Paul Wexler (テルアビブ大、イスラエル)
- 9月3日 粟屋利江(東京外国語大)、池田嘉郎(新潟国際情報大)、菅英輝(西南女学院大)、山室信一(京都大)
- 9月8日 中澤香世(JICA 研究所)
- 9月9日 上垣彰(西南学院大)
- 9月10日 金野雄五(みずほ総合研究所)、Pogosyan Grant (ICU)
- 9月11日 今井宏(日本総合研究所)
- 9月15日 山田孝子(京都大)
- 9月17日 Adrian Favell (UCLA、米国)
- 9月18日 坂中紀夫(神戸市外国語大・院)
- 10月3日 工藤信彦(社団法人全国権太連盟)
- 10月5日 大川壮一郎(外務省)
- 10月15日 三村光弘(環日本海経済研究所)
- 10月19日 Andrei Zorin (オックスフォード大、英国)
- 10月22日 Leo Rafolt (ザグレブ大、クロアチア)

◆ 研究員消息 ◆

宇山智彦研究員は7月17～20日の間、科学研究費研究に関する会議での研究報告のため、中国に出張。また、8月16～22日の間、新学術領域研究に関する国際会議成果発表のため、インドに出張。また、10月28日～11月2日の間、科学研究費研究に関する国際会議における研究報告のため、イタリアに出張。

田畑伸一郎研究員は8月2～9日の間、新学術領域研究に関するユーラシア地域大国の比較研究に関する調査のため、ロシアに出張。また、11月11～17日の間、新学術領域研究に関する研究成果発表のため、米国に出張。

松里公孝研究員は8月13～20日の間、科学研究費研究に関する中国西部のイスラーム宗教行政の調査とロシアとの比較のため、中国に出張。8月22～30日の間、新学術領域研究に関するセミナー出席及び研究打合せのため、中国に出張。また、8月31日～9月26日の間、科学研究費研究に関するロシア南部農村調査、アブハジアで正教の調査のため、ロシアに出張。

荒井信雄研究員は9月3～11日の間、環オホーツク環境研究ネットワークの構築に関する研究打合せ、資料収集等のため、ロシアに出張。また、9月20～27日の間、科学研究費補研究に関する国際シンポジウム参加報告及びウラジオストク市内の国立沿海地方文書館での資料調査収集等のため、ロシアに出張。

野町素己研究員は9月10～20日の間、新学術領域研究に関する現地調査のため、ロシアに出張。

望月哲男研究員は9月10～20日の間、新学術領域研究に関する現地調査のため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は9月10日～10月5日の間、新学術領域研究に関する資料収集のため、インドに出張。

林忠行研究員は9月16～28日の間、科学研究費研究に関する資料収集、聞き取り調査のため、チェコ、スロヴァキア、オーストリアに出張。

岩下明裕研究員は9月26日～10月1日の間、科学研究費研究に関する成果報告のため、ロシアに出張。また、10月28日～11月2日の間グローバルCOEプログラムに関する研究打合せ等のため米国に出張。

ことしもちょっと遠出して長沼町のハイジ牧場で観 楓会をしました。(2009.10.4)



赤ちゃんヤギさんはまだ人見知りなのね



よし、乾杯だ



色々な動物が飼われていました



はい、センターニュース用に写すから、
その辺の人たち、集まって！

エッセイ

田原史起	中国研究者がロシアの農村で考えたこと	p. 9
松里公孝	スラブ研究者が甘肅で考えたこと	p. 14
野町素己	セルビア科学芸術アカデミー会員 Irena Grickat-Radulović (1922-2009) を偲ぶ	p. 19
松里公孝	ICCEES 執行部の幕張訪問	p. 21

2009年11月2日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 田畑伸一郎
発行者 岩下明裕
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>